

富士紡と文化遺産

富士紡績(株)小山工場

紡績/駿東郡小山町小山/第一・二工場

RC・煉瓦・木・混構造平家建/大正 13 年(1924)/施工清水組

明治期における富国強兵の一端として、工業の隆盛が計られ、県内では富士川の水力を利用して製紙業が起こされた。紡績では製紙業と同様に大きな動力を必要とするが、当時は水力を利用した発電が主力であった。明治 22 年には東海道線が開通して小山駅が開設されていたとはいえ、未だ寒村であった駿東郡六合村小山の地に、箱根・富士山系から湧き出る豊富な水を利用した紡績工場の建設が計画されたのである。

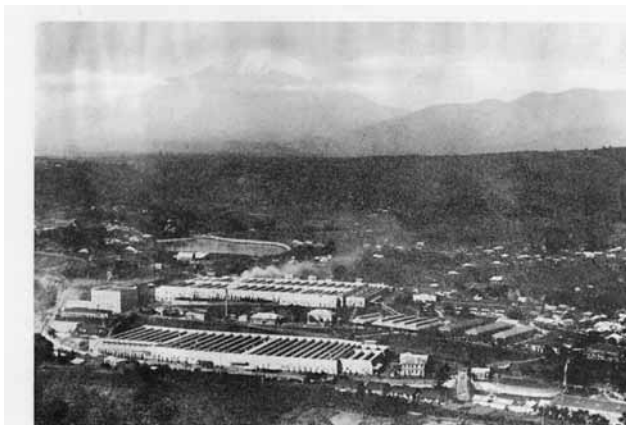
明治 29 年(1896)3 月、新興工業であった紡績事業への進出を目指し、富士紡績(株)が設立された。

29 年 8 月から水路開削や道路敷設等の土木工事が始まり、続いて、工場および附属建物の建設が開始された。設計および監督については、妻木頼黄が顧問として関わり、柱や梁書の用材に当時としては珍しい米材が多用された。30 年 12 月 19 日に上棟式を挙行し、翌 31 年 6 月には第一工場(綿糸)・第二工場(絹糸)の建築工事の全てが落成した。

明治 39 年には東京瓦斯紡績を合併して、社名を富士瓦斯紡績に変更した。創立 10 年を迎えて工場門前の鮎沢川に新橋を架け替え、創業以来尽力のあった森村市左衛門の業績を言己念して「森村橋」と名付けたのも、この年であった。40 年には第三工場(綿紡績)、42 年には第四工場(綿紡績)を完成し、その後大正年間に入っても小山第五工場(綿織布)を初め各地で工場の建設や拡張を計り、さらには同業数社の合併を行うなど、国内における紡績業の代表として順調に発展を遂げていった。



現在の第一工場



第一・二工場全景（昭和 2 年当時）



鑄鉄製の接合金物

ところが、大正 12 年(1923)に発生した関東大震災により、ここ小山工場は壊滅的な被害を蒙ったのである。震災後直ちに復旧に取りかかり、小山工場では清水組の施工によって、翌大正 13 年には第一・第二・第五工場の完成を見ている。その後、第三・四工場も再建され、15 年には震災前に匹敵する生産規模にまで復興された。

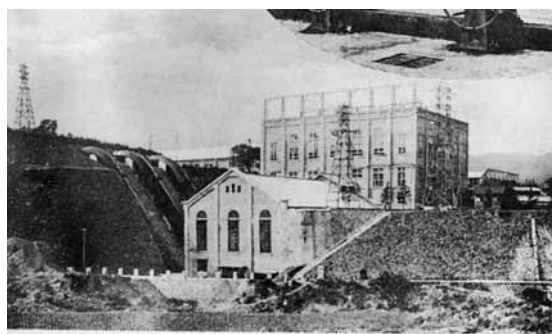
昭和 20 年(1945)、終戦間際の 7 月 30 日に小山工場は空襲を受け、第四工場は焼失、第一～三工場も軽微ながら被害を蒙った。戦後復興に伴い 20 年 12 月には、社名から「瓦斯」の 2 字を除いて元の富士紡績(株)に戻し、現在に至っている。

小山工場の概要は、鮎沢川北側の一段高い菅沼の地に第一・二工場が建ち、それに付属して診療所・森村橋・発電所(現東電菅沼発電所)等がある。他は、東方に約 1.5km 離れた小山駅(現御殿場線駿河小山駅)のすぐ“北側に、第三～六工場及び事務所等が配されてる。

第一・二工場の建物は、広い面積を必要とする工場建築の通例に従い、鋸屋根を連続させた形式を採っているが、関東大震災後の建築らしく、鉄筋コンクリート造の柱や梁で架構され、その間に煉瓦を 1.2 尺の厚さに積んで外壁を構成し、表面を白色に塗装している。内部は米松の柱を立てて木造の小屋組を支え、床は転ばし根太に床板を張っている。柱と小屋材の接合部には、鋳鉄製の金物が用いられており、大正期の施工技術の一端を窺い知ることができる。



富士紡績小山工場関連施設配置図



第一工場南側の発電所（昭和 2 年当時）



事務所棟

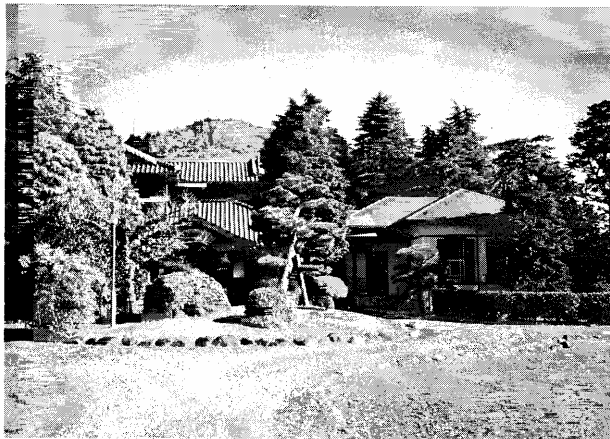
また、敷地内には木造 2 階建の旧事務所等も残されているが、残念ながら第一・二工場の施設は閉鎖されてしまい、数ある建築物も順次撤去される予定である。

なお、第三～大工場では、戦後大幅な改修が行われたり再建された建物が殆んどで、戦前の建築形式を留める部分は少ない。

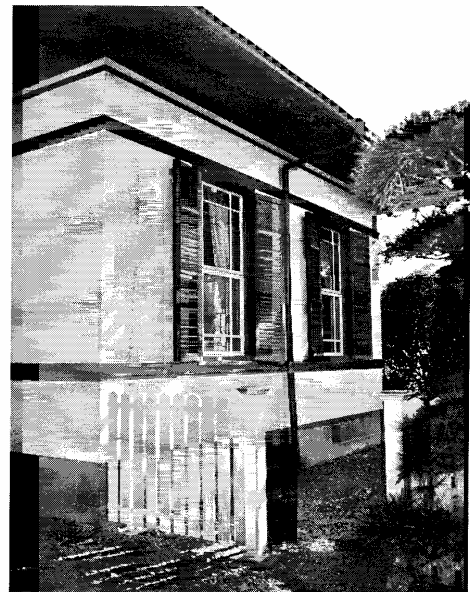
一方、工場北方藤曲の小高い丘の上には、豊門会館が位置している。(財)豊門会館は、富士紡績の従業員並びに地域住民の教育・保健・慰安等の場を提供する目的から、大正 12 年 5 月に設立申請を行い、翌年 8 月に登記された。その名称は、和田豊治社長の「豊」と、富士紡の三門と称せられた森村市左衛門・日比谷平左衛門・浜口吉右衛門の三翁の「門」をとって名付けられたものである。大正 13 年 3 月に死去した和田社長の遺志によって、東京向島にあった同家の邸宅が遺族より寄贈された。

これを受けて、約 5,300 坪の庭園を築造して旧宅の移築を行い、14 年 12 月に豊門会館の施設が完成している。建物は、和田社長の旧宅であったことから、和風の住宅を基調としている。しかし玄関の右手には、上げ下げ窓に鎧戸を備え意匠的にも優れた洋館も付属している。建立年代は確定できないが、所見では明治から大正にかけての建築と考えられる。また、庭園内には昭和初期に中堅社員独身寮として建てられた豊門寮もある。木造 2 階建、下見板張の清酒な建物で、現在も社員寮として使われている。

(建部恭宣)



豊門会館全景



洋館

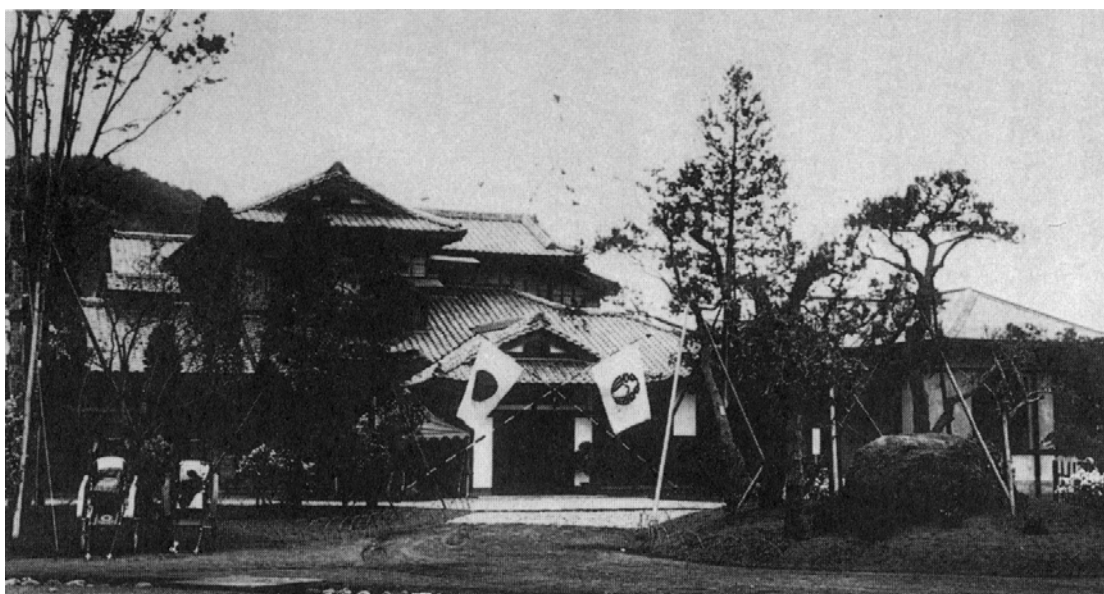


豊門寮

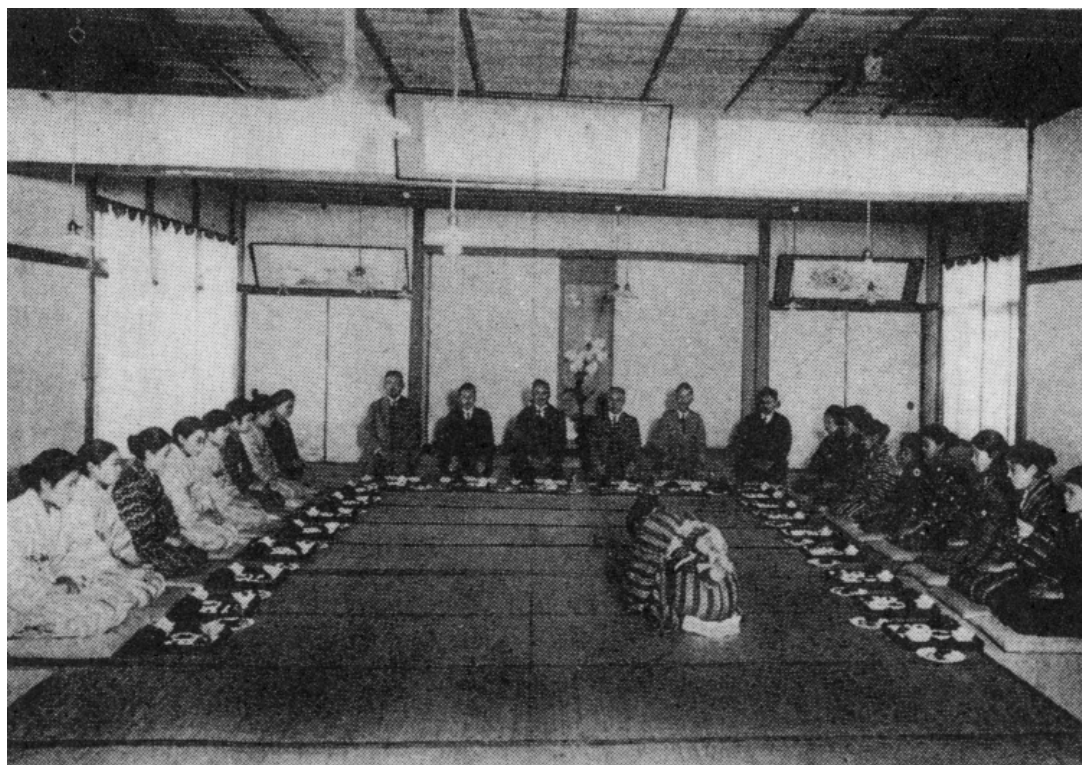
<参考文献>

- 1) 『富士紡績百年史』上巻富士紡績(株)1997 年
- 2) 『小山町史』各巻小山町

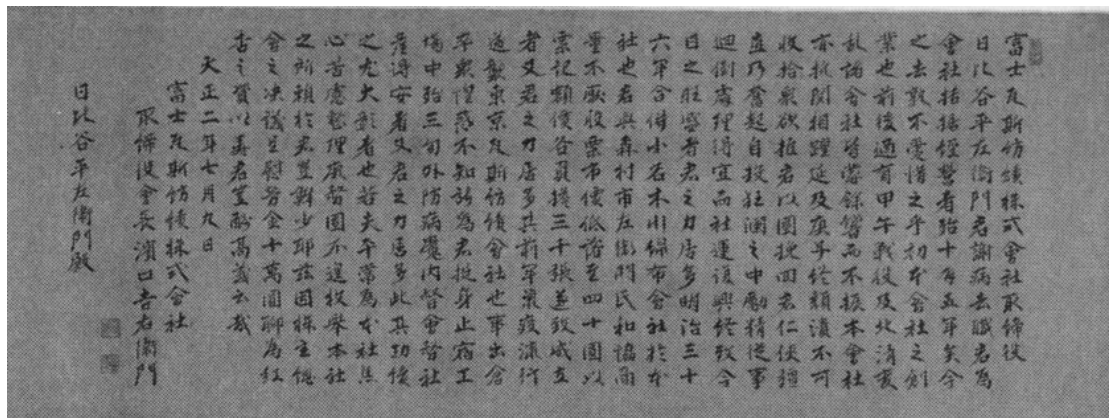
「静岡県の近代化遺産」より



移築完成した豊門会館



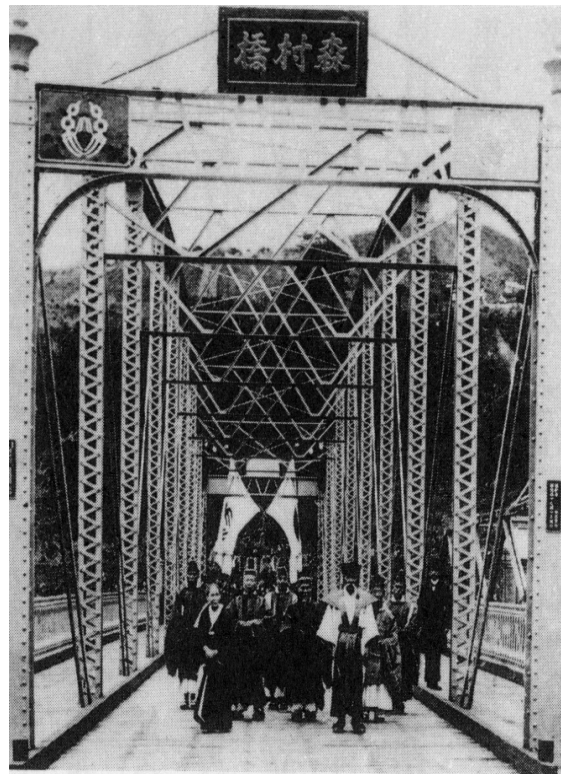
小山工場の家事講習会料理作法



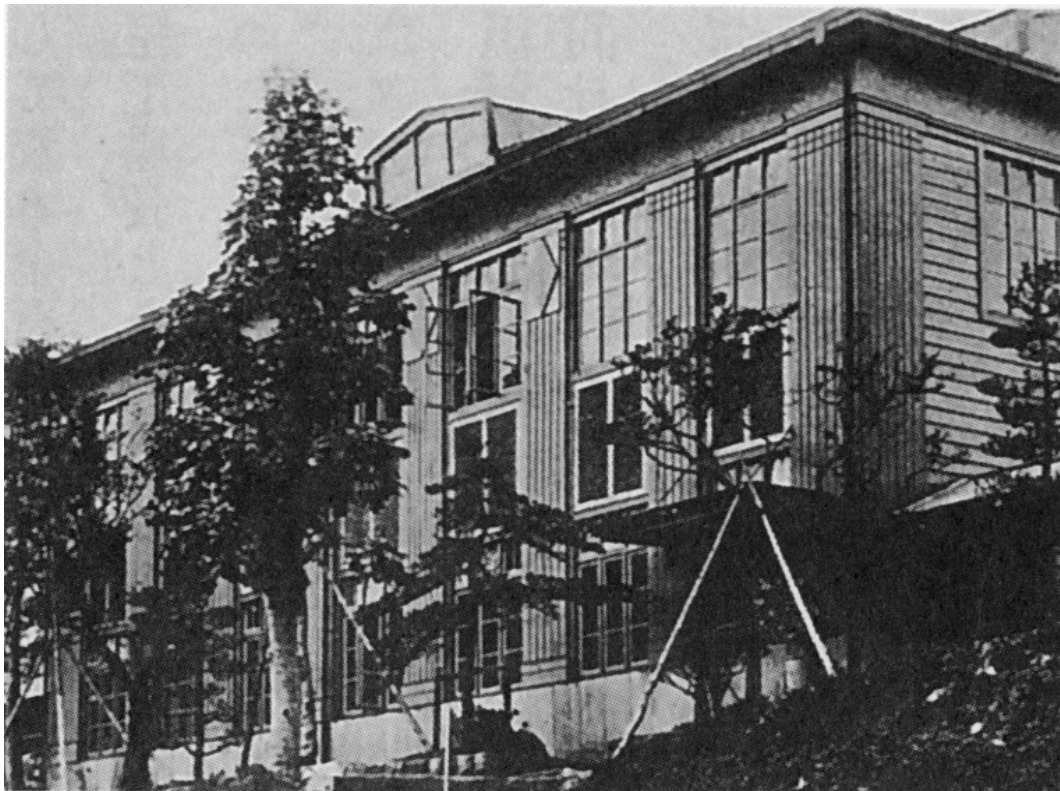
日比谷翁への感謝状（豊門会館蔵）



日比谷翁銅像



森村橋渡橋式



震災後建築の小山第1、第2工場事務所



小山工場の御大典記念大運動会

入り口付近



庭園内（南側）



庭園内（成美小側）



庭園内



庭園より本館を望む



池（庭園中央）



西洋館全景



西洋館裏手



西洋館（食堂）



一階廊下



一階



一階



階段



裏手



本館玄関



玄関横



待合室



応接室



テラス



テラス



応接室



応接室



畳廊下



和室



二階



二階



風呂場



洗面所 トイレ



本館裏手からの全景



富士紡事務所



大正 15 年、富士紡績小山 1・2 工場の事務所として建設。洋風建築の建物は木造 2 階建て。窓が大きく取られモダンな造りとなっている。

大正ロマンを感じさせる建物が消えていくなかで、歴史の古いフジボアの工場内にはそれら良き時代を思わせる建物が現存しています。鮎沢川を見下すように建てられている総二階造りの白い建物は 1・2 工場が出来た頃からのものでガラス張りで、当時としてはモダンな建物だったことでしょう。

今は会議室や書庫として使われているとの事ですが古き良き時代の遺産とも云えるでしょう。

解体（平成 13 年）

清水組

富士瓦斯紡績小山工場第三工場が明治 40 年に竣工しているが、これが県内における清水組の仕事として早い例である。昭和 2 年の浜松市公会堂以降、中村與資平の設計した作品をかなり多く施工している。現存するものとしては、遠州銀行本店(現静岡銀行浜松支店、(昭和 3 年)・浜松銀行集会所(現浜松銀行協会、(同 5 年)・第三十五銀行本店(現静岡銀行本店、(同 5 年)等が挙げられる。現存はしていないが、昭和 17 年から 20 年にかけて、陸軍少年戦車兵学校・沼津兵器工場事務所・中島飛行機浜松製作所等、軍事・軍需関連の建設にも多く関わっていた。

静岡県の近代化遺産から

妻木頼黄 つまき よりなか

安政 6 (1860) 年 12 月 10 日、江戸の赤坂にて旗本の家にも生まれた。

明治 7 年、工部省電信寮で電信技術を学び、明治 8 年に慶應義塾に入塾し、明治 9 年には渡米し、翌年帰国した。明治 11 年、工部大学校造家学科に入学するが、明治 15 年にコーネル大学に留学するために退学した。明治 17 年、コーネル大学を卒業し、R. H. ロバートソン建築事務所に勤務した。

明治 19 年、中央官庁集中計画により臨時建築局の技師となり、留学する河合浩蔵と渡辺譲と共にドイツに派遣された。ロンドンに帰省する J. コンドルも乗船しており、ドイツまで航海を共にした。翌年、諸官庁の工事着手が議決し急遽帰国が命ぜられたが、妻木は病床にあったため河合浩蔵と渡辺譲らに遅れて帰国した。東京裁判所は既に渡辺譲の監督により工事が始まっていたが、妻木が監督を引き継ぎ完成させた。

明治 32 年、辰野金吾と共に議院建築調査会の委員となり、翌年、臨時税関工事部建築課長となった。明治 34 年、欧米出張の後、総務局営繕課長、明治 37 年、臨時煙草製造局建築部長、翌年、大蔵省臨時建築部部長を歴任した。その一方で、明治 21 年に設立された工手学校(工学院大学の前身)の会計主任になるなど、その運営に尽力し技術者を養成した。

明治 43 年、議院建築準備委員会となったが、明治 45 年頃から再び病状が現れ療養に専念した。大正 2 年に大蔵省を退官したが、大仏殿修復工事顧問などを務めた。大正 4 年、持病が再発し入院することになり、大正 5 年 10 月 1 日に勲二等正四位瑞宝章を授与されたが、その十日後に亡くなった。

主な作品：東京府庁舎(現存せず)、横浜正金銀行本店<重文>、新港埠頭煉瓦第二倉庫、大阪麦酒吹田醸造所、丸三麦

ZERO ZONE 偉人館から <http://www2s.biglobe.ne.jp/~stakers/arch/arch.html>

明治四十年以後の豊治君 「向島に新邸を作る」

和田豊治君が富士紡績会社を蘇生せしめ発達せしむるがために苦心し、如何に努力したるかは已に前章に於て之を説きしが、今や其苦心努力漸やく酬いられて会社は沈淪の中より隆起したること巨鯨が大波の中より首を挙げたるが如きものあり。而して其回復の事僅に三四年の間に行はれ殆んど名譽が起死回生の奇蹟を行ふたるが如きものあるを以て、和田の名は実業社会に於て凱旋將軍の如くに傳へらるるに至り、豊治君は之より漸やく其手を一般の実業社会に拡げんとするの志あり。之より先き三十七年小山工場の秩序紀律稽綽立ちて会社の前途安全なるべきを見るや、豊治君は其家族を東京に返して一家を經營せしめ、自から小山に居住して時々東京に出でしが、暫らくして小山に居る時と殆んど相半ばするに至りたり。前年鐘紡の支配人時代に購入したる向島の海堂園に新宅を建築したるは此頃にある。豊治君今や風流第一を以て任じたる柳北翁の名園を管領し、花晨時として園遊会を催し多方面の友人を召集す、其得意思ふべきなり。此新邸に関して楠本君の語る所頗る面白き逸事を傳ふるものあるを以て此に掲ぐ。

「和田君の初めて購入したる時は母屋の方は茅葺にして書齋の方瓦葺なりしと記憶す、余は三十四五年頃本郷に居宅を構へ居りしが、越えて三十八九年頃和田君新に建築に着手するや、余に向つて君は建築に経験あり來つて余の新普請を検分せよと云ふを以て、余即ち和田君の新築場に至り和田君に向つて此普請成就の曉は柳北先生の書齋は不用となる譯なり、如何に之を処分せんとするやと問ひしに、和田君別に処分に関して考慮する処なしと答ふ、仍て余は和田君に向つて実は郵船会社に社長たりし故吉川泰次郎氏の遺族今境遇甚だ豊ならず、憐むべきの状態にありて其舊本邸は日下義雄氏に売却し一家は塀外の小屋に居住し八十四歳の老齡なる故人の母堂の居室さへ之れ無きの有様なり、幸に柳北先生の書齋にして君の不用に○せば程遠からぬ近隣のこと、願くは吉川母堂の居室として柳北先生の書齋を寄贈し呉れずやと物語りしに、和田君日く善哉々々、此の書齋にして斯の如き善行に利用し得るならば、余は悦んで贈呈せんと、○に於て余は其の書齋を和田君より貰ひ受け遠からぬ吉川氏の遺族の居住せる家屋に接して増築することと爲し、柳北先生の舊書齋なるものに更に二室を加へて増築し之を老母堂に贈呈したり。老母堂之を悦ぶこと甚しく終に其の居室に於て永逝したり。其後吉川氏の遺族故あつて大森に移転する

や、和田君寄贈の書齋もまた之を移して建築したりしが、余は吉川氏の令息に向つて此の書齋の由緒を語り、成島先生より和田君に移り、而して和田君の好意に由つて貴家の有となりしものなるを以て、永世保存の誠意を持続すべしと語り置きしが、其の後吉川氏の嗣子もまた失敗し、數年前之を他に売却したり。而も幸に其の家屋購入者は吉川氏の令嬢の他嫁せる者の親戚なりと云へば、余の考へを以てすれば此の書齋たるや柳北先生の居室なりし上に、財界の巨人となりし和田豊治君が落托の境涯を脱して初めて自家所有の家屋に居住し、身を起すの素地を作りたる最も意義ある紀念物なれば、之を現時の持主より譲り受け、和田君に最も関係深き小山或は其の他何れかの地点を選びて建設し永久保存の策を講じたし』と云ふ。

「和田豊治傳」から



氏田和と堂母るけに於に開立邸島向年二十四治明

立案三たびに及ぶ

清水 釘 吉

清水組創業者（現 清水建設）

余は幼年の頃、慶応義塾に学びしが、当時塾に於ては大人寮、中年寮、童児寮及び幼稚舎と云ふものありて、余は其の童児寮の一室に居りたる所、童児寮には大人寮の学生にて模範たるべき人各々分れて一人宛監督に来るの制度とて、余の寮監督として丁度和田氏が来られ、極めて短日月の間なりしも、同氏の監督を受けし一兒童たるの縁故を有せり。

今日より追憶すれば只だ謹厳にして言葉少き人なりしと思ふに過ぎず、爾來清水組としては氏の鐘紡時代より恩顧を受くること多く、次で富士紡に入りし後は公私共に多大の〇顧を蒙り、会社の増築新設拡張殆ど一手に用命を受くるの信用を得、従つて向島の私邸及び移転したる飯倉の邸宅等、改築増修等何れも清水組の用命を受くる所となり、無上の面目を施したり。

余は以上の関係よりして和田氏の膿大細心なる黙を知るを得て、益々其の人物の偉大なるを驚歎したり。関東大震災の爲め富士紡の各所の工場は非常なる打撃を蒙りしが、直後六日の日なりしと思ふ、和田氏自ら清水組本店に来られ、種々工場の善後策に付き講究し、引続き再度に見えられ具体的協議に入りし所、氏の性質は遺憾なく發揮され如何にも放膿なるが如く見ゆるも、此の時は微細に亘りて設計上の質問をなし、また意見を述べ決して確定案に入らず、彼是の研究を重ね所謂衆智を集めて最後の決定に入らんとして遂に清水組をして設計工事施工法とも三回の案を立てて参考に供するに至らしめたり。此の三案に対して更に研究し、愈々決定するに至らば施工は非常の速力を以て進捗せしめざれば承知せざるの性質なり。

既に十分の研究と調査とを積みて断案を下すが故に決して悲観を伴はず、非常なる元気を以て復興に努力しつつありしに、遂に起つ能はざるに至りしは濁り富士紡の爲めのみならず、実業界稀に見る人格者を失ひしことに於て国家の損失と謂ふべきなり。

「和田豊治傳」から



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No. 5 1997.4.

「現代への架け橋ー静岡県の土木建造物ー」が刊行される

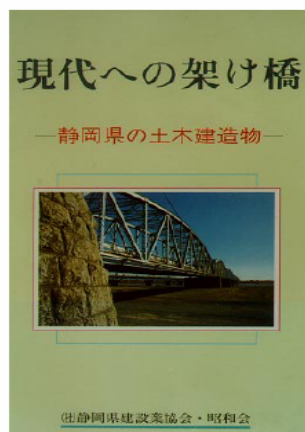
現在供用中の古い建造物には土木史上貴重なものも多いが、その実態は未だ十分調査されていない。そのため、時の流れの中で新建造物に地位を奪われ、撤去されるものも少なくない。

静岡県では最近「古い建造物の実態を調査し、小冊子にまとめて刊行しよう。」との気運が高まっていた。これを受けて、昭和会は平成6年10月「古典的建造物」の検討委員会を設置し、会員を対象建造物を募ったところ、300件以上の候補が寄せられた。その中から、①建設時期が昭和20年以前、②各市町村から1件以上、③写真集に適する、等を考慮して220件が選定された。

建造物の調査は国・県・市町村など多くの関係機関の協力を得て進められた。文献調査では委員が困難を克服しつつ資料収集と解説にあたった。最も重要な写真撮影では会員会社のアマチュア・カメラマンがボランティアで腕を奮った。

2年間の精力的な活動が実を結び、平成8年10月本書が刊行された。先人の残した貴重な土木遺産保護のため、今後、他の都道府県でも同様の活動が推進されることを期待する。

((社) 静岡県建設業協会・昭和会 今井 公平)



現代への架け橋ー静岡県の土木建造物ー
(社) 静岡市建設業協会・昭和会編A4判・160頁
土木学会図書館で閲覧可。また、ご希望の方は
印刷実費1000円、送料380円を添えて下記まで。
〒420 静岡県御幸町9-9 Tel. 054-255-0234
(社) 静岡県建設業協会・昭和会

森村橋

鉄道/駿東郡小山町小山 鋼曲弦プラットラス橋 明治 39 年(1906)

設計 秋元繁松 施工 石川島造船所

明治維新以後、日本の産業の立役者は、紡績・製紙産業であった。その当時、産業の動力は火力発電が主だった。しかし、英国で学んできた知識人の間で、コストの安い動力として水力発電の評価が高まってきた。紡績を水力でと、株式を募ったところ予想を上まわる反響をよび、水資源が豊かで交通の便の良い所という事で、鮎沢川があり東海道線の通る小山町へ建設された(当時は御殿場線が東海道線)。創立時は、士族の商法で、うまくいかず破滅寸前に追い込まれた。その時、個人保証を行って経営に助力したり、新株発行に際し、損益を超越して、引き受けてくれた人が森村市左衛門翁であった。社業の復活隆盛になった創立十周年に、会社が第一に感謝の意を表さなければならない人は森村翁であった。銅像の建立、記念碑の建設、記念品の贈呈等を検討したが、いずれも拒否された。当時工場の門前、鮎沢川の橋は粗末な木造橋で、会社が隆盛に向かい、遠からず架け替えの必要があった。そこで、この際鉄橋に架け替え、「森村橋」の名を付して、翁の功労を永遠に伝える事になった。

森村橋は、明治 39 年(1906)に施工された単径間の鋼曲弦プラットラス橋で、部材長の長い斜材が引張部材、垂直材が圧縮部材となる効率のよい形式となっている。橋長は 39.2m、幅員は 4.8m であり、中部地方最古の鋼トラス橋と云われている。本橋梁の橋門構に照明灯を設置しており、また端柱に設計者(秋元繁松)や竣工年月が刻まれているなど当時の風合がみられる。当時は、東海道線小山駅から鮎沢川対岸にある工場に原材料及び製品の輸送のため、橋の中央に軌道を敷設し、トラスの外側に歩道を設けて使用していた。トロッキの廃止に伴い、昭和 43 年に軌道を取り除き、トラック輸送等に備え鉄板を設置した。現在は、道路橋として舗装されている。今も森村橋は、山と水の美しい小山溪谷に変わらぬ偉容をほこっている。(臼井良太) <参考文献> 1)『富士紡績百年誌』富士紡績(株)1997 年



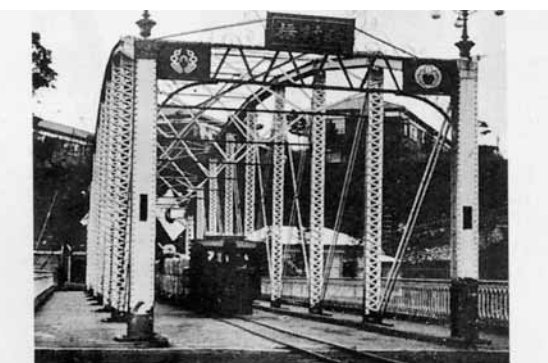
森村橋正面



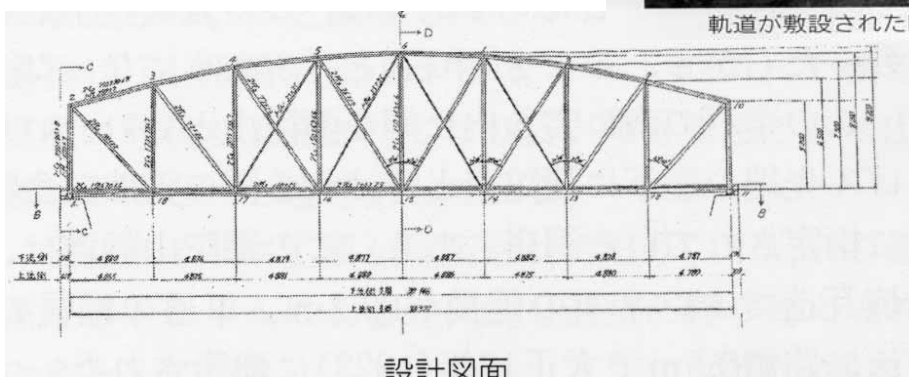
銘板



銘板



軌道が敷設された時代の森村橋



設計図面



日本土木学会 平成6年発行

紡績工場の正門

34

森村橋

もりむらばし

静岡県東部の山あいの町、小山は、綿糸生産の町である。鮎沢川沿いの狭い谷間に、富士紡績株式会社小山工場とその関連施設が展開している。この工場は富士山の雪解け水を集めて流れる鮎沢川の豊かな水力（当初は水車動力、のち電力）に依存して明治29年（1896）に創業したもので、100年近い歴史がある。

この地に鉄道が開通したのは、明治22年（1889）2月1日のことで、東海道線の国府津－静岡間が開業したのである。同年7月1日には東海道線新橋－神戸間が全通した。当時は、現在の御殿場線が東海道線であり、熱海・丹那トンネル経由の現在の東海道本線が開通し、旧線が御殿場線と改称されるのは昭和9年（1934）12月1日のことである。

さて本題の橋は、かつての東海道線小山駅（現御殿場線駿河小山駅）から、鮎沢川の対岸にある工場に通じるトラス橋であって、創業から10年後の明治39年（1906）に完成した。

当初は、橋の中央に軌道が敷設され、トラスの外側に歩道がついていた。

また、工場の正門にある橋であるから、それにふさわしい意匠が整えられていた。いまではほとんど失われてしまったが、橋門構上部の橋名板、家紋の透かし模様、街灯などが付属しており、橋詰の柵も相応のものであった。

橋名は、富士紡績の創業に関わった人物の一人、森村市左衛門に由来している。会社にとっては、創業時代の由緒ある橋であるから、近年実施された修理も、外観を大きく変えることなく、苦心の補修・補強が施され、大切に扱われている。

さて、このトラス橋であるが、構造的にはアメリカ流のピン結合プラットトラスで、引っ張り力が作用する下弦材や斜材にはアイバーが使われている。端柱は鉛直で、上弦材は放物線（折れ線であるが）を描いている。路面を支える床組みが下弦材よりも下に吊り下げられている構造も特徴の一つである。また、形鋼に BURBACH などの浮彫り文字が読み取れるので、材料は、ドイツのメーカーから輸入されたものであることがわかる。

なお、上述の修理は下弦材と斜材とそれらの結合点（格点）あたりに集中しており、実質的にピン結合から剛結合へと補強されている。

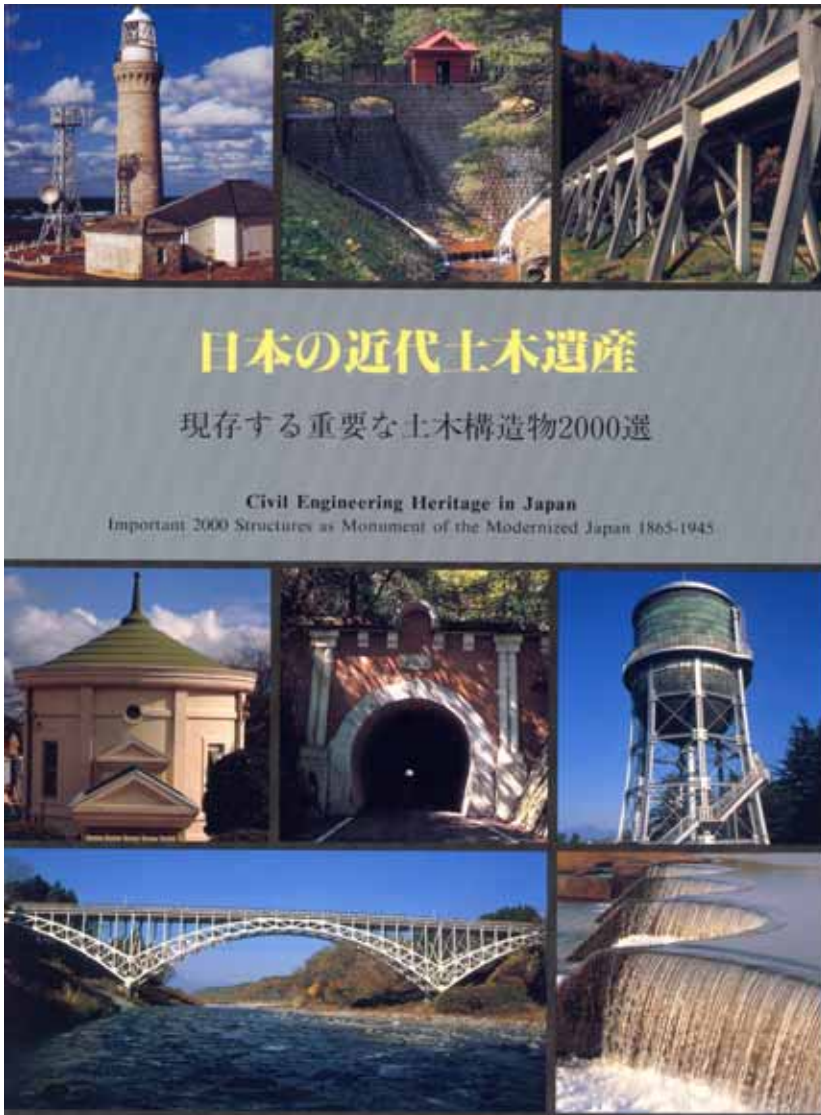
橋には2種類の銘板が取り付けられている。いずれも縦書きであるが、1枚には「東京石川島造船所 明治三十九年製作」、もう1枚には「設計者 秋元繁松」とある。初めの1枚は、銘板に必ず表示する事柄であるが、後の1枚の設計者を表示した例はわが国ではまれで、大変めずらしい事例といえよう。なお、秋元繁松は京都帝国大学土木工学科を明治36年に卒業した人である。

〔K J〕

開通年月：明治39年（1906）11月
所在地：静岡県小山町
河川名：鮎沢川
橋長・幅員：約40 m × 4.877 m（主構中心間距離）
径間数・支間長：1 × 39.0 m
形式：下路曲弦プラットトラス（ピン結合）

日本の近代土木遺産に選ばれた小山町の土木構造物

名称	市町村	付帯情報	形式	諸元	完成年	文化財等	ランク	評価情報
森村橋	小山町	富士紡績・小山工場への入り口（小山駅～工場間のトロッコ軌道）／鮎沢川	鋼プラットトラス（曲弦，ピン結合，下路）	長約40m、S39.0m（T）	明治39 製→道路化		A	設計：秋元繁松、製作：東京石川島造船所／斜材取り付け部を補強／橋門構隅角部に唐草模様／会社の創立に貢献した森村市左衛門から命名
須川発電所取水堰堤	小山町	東京電力（富士紡績）／須川	練積C堰堤（全面溢流式，越流部＝直線）	高11.43m、長44.84m	大正1		B	高さ10mを越える保存状態の良い練積坊主堰堤
生土発電所	小山町	東京電力（富士電力）／鮎沢川	R C建造物（ろく屋根）	最大6200Kw	昭和5		C	壁面のピラスター列：簡略化された柱頭をもつオーダー＝ユニークな造形



ランク A～Cの3ランクに分けて表示する。ランクは、後述の『評価基準』に準じて、下記の評価情報を参考に決める。Aランクは最も重要な土木遺産で、国指定重要文化財に相当する。Bランクはそれに次ぐ重要な土木遺産で、都道府県指定の文化財に相当する。CランクはA・Bランク外の重要な土木遺産で、国の登録有形文化財や区市町村指定の文化財に相当する。ランクは確定的なものではなく、一応の目安として考えていただきたい。AランクとCランクの差は明らかであるが、AとB、BとCのように隣接したランク同士では差は僅かである。

編集 土木学会 土木史研究委員会 委員長 佐藤馨一
 発行者 社団法人 土木学会 三好逸二
 発行所 社団法人 土木学会
 発行日 平成13年3月30日

日本の近代土木遺産「現存する重要な土木構造物2000選」から

58 ほうもんかいかん (財)豊門会館

住居／駿東郡小山町藤曲／木造2階建／明治～大正

豊門会館は、富士紡績の従業員並びに地域住民の教育・娯楽・保健・慰安等の場を提供するために設立された財団法人で、会社重役一同からの寄附によって。設立申請を大正12年5月に行い、翌年8月22日に登記された。「豊門」という名称は、初代社長和田豊治の「豊」と、富士紡の三門と称せられた森村市左衛門・日比谷平左衛門・浜口吉右衛門の三翁の「門」をとって名付けられたものである。和田豊治は、明治29年(1896)の富士紡績株式会社創業時から続いた経営不振の再建のため、明治34年専務取締役役に抜擢された人物である。彼の就任後、他社との合併を経て、39年富士瓦斯紡績株式会社と改称して10周年を迎える。その記念として創業時より尽力した森村市左衛門にちなんで鉄橋「森村橋」を開橋した。大正5年(1916)和田は社長に就任する。12年9月の関東大震災で大被害を受け、和田は陣頭に立って復興事業を進めるが、13年3月急逝してしまう。その後、彼の方針に従って復興が進められ、その中の福利厚生施設として豊門会館が設立されたのである。建物は和田豊治の遺志によって、東京向島にあ

った同家の邸宅が遺族により寄贈され、14年これを受けて、小山町藤曲のふじまがり小高い丘の上に約5,300坪の庭園を築造して旧宅の移築を行った。同年12月に豊門会館の施設が完成し、15年5月盛大な開館式が執り行われた。また庭園内には和田社長の記念碑が建つ。

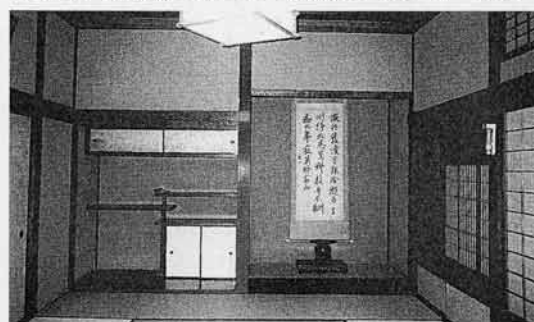
豊門会館は、木造2階建、入母屋造、棧瓦葺に木造平家建、棧瓦葺が付属する和館部分と木造平家建、寄棟造、サンルーム付の洋館部分からなる。

和館に入母屋造の主たる玄関を設け、双折棧唐戸を開くと、モルタル磨き出し四半敷目地切の土間が現れる。続く畳敷の八畳正面に渋沢栄一書の「豊門会館」扁額を掛ける。右手の応接間は洋間とし、建具は洋風のドアを用いるが、正面の窓外側には格子を打ち、外観は和風でまとめる。1間幅の畳廊下を間に挟み、雁行形に座敷を配置し、4尺幅の縁を廻す。座敷部分が2階建になっており、階高は12.95尺と高く、内法高は京都風で5.7尺、柱は4.2寸角とし、母を用いた母普請である。

1階の庭に面した十畳と八畳が座敷の扱いである。十畳は、薄縁敷の床の間と床脇には違い棚・天袋・



正面



1階十畳



南面



洋館

地袋を備え、付書院を付す。床柱・落掛は梅、床框は真塗とする。床脇は樺を用い、天袋小襖は金もみ紙を張る。付書院の欄間は杉空板に朝顔を透かし彫りにする。壁はやや赤味がかった土塗壁である。天井高は9.4尺と高く、二重廻縁の竿縁天井とする。八畳は樺一枚板の床の間と平書院を構える。縁側は1・2階とも同様に梅樽板張で、化粧屋根裏天井とする。

2階も庭に面した八畳と十五畳を座敷とする。八畳は、樺一枚板の床の間と、床脇に地袋を設ける。地袋小襖の引手は、珍しい題材で右側を「奴」、左側を「僧形」とする。天井は畳割りと同様に竿縁で区切られ、長手に年輪を見せた杉の一枚板張りである。十五畳には1間半の薄縁敷の床の間、両脇に棚、付書院を付す。床の間前には同幅の畳を敷く。右側の床脇天袋の小襖は金箔押しで、引手は「梅に鶯」である。付書院の欄間は桐板とする。

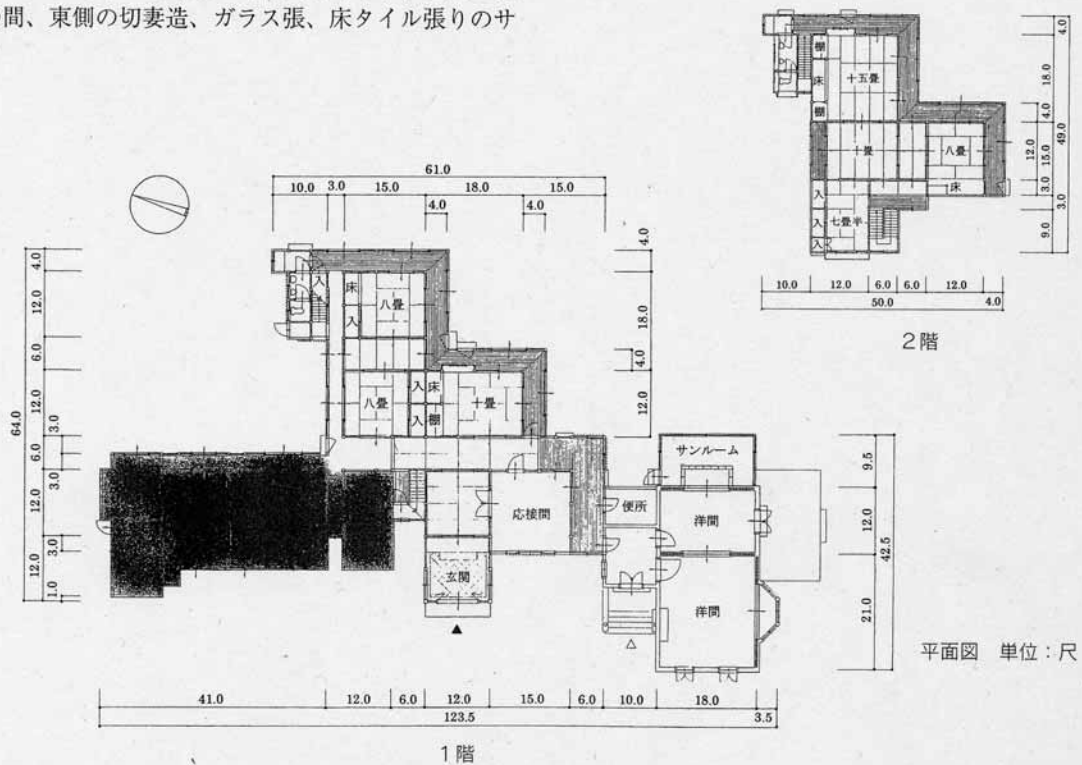
和館の南側に洋館が続き、基本的に尺で計画される。和館寄りに洋館用の玄関が設けられ、主室と次の間、東側の切妻造、ガラス張、床タイル張りのサ

ンルームから成る。床は寄木張、壁は壁紙を張り、部屋境には引込戸が設けられる。開口部は上げ下げ窓とし、正面外側には鎧戸を、内側には木製のカーテンレールが備えられる。主室の北側には白大理石の暖炉が設けられ、南側は台形に張出す。天井は両室とも漆喰塗りで、中央に円形照明座を造り、主室の全面に施された漆喰装飾は見事である。

和田豊治郎としての建立年代は確定できないが、明治から大正の建築と考えられる。また敷地内には、昭和初期に建てられた木造2階建、下見板張の中堅社員独身寮「豊門寮」がある。（新妻淳子）

<参考文献>

- 1) 富士瓦斯紡績株式会社小山工場『写真帳』室伏写真館 1927年
- 2) 富士紡績株式会社社史編集委員会『富士紡績百年史』上巻 富士紡績株式会社 1997年
- 3) 『小山町史』第八巻 近現代通史編 小山町 1998年



銅像等調査

◎赤抜きの NO. (列) が調査済み、もしくは調査中です。
皆様には、黒文字 NO. の作品の調査をお願い致します。

◎青文字 NO. は、関係者からの報告で、像が現存する
が、あくまでも、未調査である事を示しています。

◎緑文字 NO. は、関係者からの報告で、像が現存しな
いが、やはり未調査である事を示しています。

(最終更新日 2002.01.13)

番号 ・ 存否 ・ 所在 ・ タイトル ・ 偉人の倂 ・ 形式 ・ 旧所在地 ・ 竣工年 ・ 制作者

217 静岡県 征清記念銅標 金鷄標 浜松 1902 年 沼田一雅、桜岡三四郎、津田信夫

218 × 静岡県 日比谷平左衛門像 ＊ 立像 駿東郡小山町富士瓦斯紡績会社工場 1907 年 記載なし

し台座は現存 (豊門会館内 大熊氏広作)

219 ○ 静岡県 市川紀元二像 ＊ 立像 東京帝国大学医学部構内 1908 年 新海竹太郎

220 × 静岡県 市川紀元二像 ＊ 立像 静岡県磐田市磐田駅 (旧中泉駅) 東側 1908 年 海野美盛

221 静岡県 井上 馨像 ＊ 立像 蒲原郡袖師村横砂 1910 年 岡崎雪声

222 静岡県 大谷嘉兵衛像 ＊ 立像 静岡市音羽町清水公園 1916 年 記載なし

223 静岡県 綾部 關像 ＊ 胸像 静岡市城内尋常高等小学校内 1917 年 三浦長壽

224 静岡県 高山仰止像 ＊ 立像 浜松市元城尋常高等小学校内 1921 年 武石弘三郎

225 静岡県 日置弾正像 ＊ 座像 周知郡森町天宮 1923 年 記載なし

226 静岡県 恩田鐵弥像 ＊ 胸像、天使群像 庵原郡興津町農林省園芸試験場内 1924 年 唐杉誠一

227 ○ 静岡県 和田豊治記念碑 ＊ 石塔 駿東郡小山町藤曲豊門会館内 1925 年 朝倉文夫

228 静岡県 森永太一像 ＊ レリーフ 田方郡錦田村谷田 1925 年 記載なし

229 静岡県 松島十湖像 ＊ 立像 浜松市東鳴江町長者平鴨江寺 1926 年 山本瑞雲

230 静岡県 橋本馬吉像 ＊ 立像 蒲原郡袖師村秋葉神社内 1926 年 記載なし

231 × 別作 静岡県 清水次郎長 ＊ 座像 清水市梅蔭寺境内 1927 年 吉田三郎

232 静岡県 橘 周太像 ＊ 立像 歩兵第 3 4 連隊衛門前 1927 年 北村西望

233 静岡県 河西哲英像 ＊ 胸像 静岡市県教育委員会構内 1928 年 沼田 寅

234 ○ 再鑄 静岡県 高山林次郎 (樗牛) 像 ＊ 胸像 清水市龍華寺境内 1929 年 朝倉文夫

235 静岡県 金原明善像 ＊ 胸像 浜名郡和田村薬師八柱神社境内 本山白雲

236 静岡県 和田豊治像 ＊ 胸像 駿東郡小山町豊門会館内 記載なし

(屋外彫刻調査保存研究会・事務局)

<http://www4.famille.ne.jp/~okazaki/zenkokuchousa1.htm>

朝倉文夫（あさくらふみお）

1883年（明治16年）渡辺要蔵の三男として生まれました。1893年（明治26年）朝倉種彦の養子となり4月に直入郡高等小学校（当時竹田市は直入郡（なおいりぐん））に入学しました。1903年（明治36年）20歳の時、東京美術学校彫刻選科に入学し、1907年（明治40年）卒業作品として「進化」を作成し、研究科に入学しました。その後1908年（明治41年）10月第2回文部省美術展覧会で「闇」・「老猿」、1910年（明治43年）10月「墓守」等次々に受賞作品を完成させていきました。現在竹田にある作品は、1917年（大正6年）10月の作品「時の流れ」は豊後竹田駅前に1971年（昭和46年）設置されました。1937年（大正12年）作「杉山敦磨胸像」は竹田高等学校に、1940年（昭和15年）作「文武の像」も竹田高等学校に、1943年（昭和18年）作『翼』に続けは竹田市役所に、1946年（昭和22年）作「生誕」は竹田市勤労青少年ホームに、1949年（昭和24年）作「三相」は竹田文化会館に、1950年（昭和25年）作「瀧廉太郎像」は岡城本丸跡に、1957年（昭和32年）作「藤丸警部坐像」は西光寺に、1959年（昭和34年）作「競技前」は竹田高等学校にそれぞれ設置されています。この様に日本近代彫塑技法を確立し、明治・大正・昭和にわたり、日本美術界の重鎮であった彫塑家です。自然主義的写実描写に徹した精緻な表現姿勢を一貫して保ち続け、「東洋のロダン」と呼ばれました。

竹田温泉「竹田茶寮」 滝廉太郎銅像から <http://www.h4.dion.ne.jp/~chikuden/>

朝倉文夫の略歴

1883（明 16）	3月1日、大分県大野郡朝地町に生まれる
1893（明 26 10 歳）	朝倉宗家を継ぐ
1902（明 35 19 歳）	竹田中学校を中退 上京し実兄の彫塑家、渡辺長男宅（旧下谷区谷中初音町）に住み彫塑を学ぶ
1903（明 36 20 歳）	東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻選科に入学
1907（明 40 24 歳）	同校彫刻選科卒業、卒業制作「進化」 谷中天王寺にアトリエ新築、朝倉塾として子弟養成
1908（明 41 25 歳）	第2回文展「闇」2等賞（最高賞） 文部省買上（原型なし）
1909（明 42 26 歳）	東京美術学校研究科終了 第3回文展「山から来た男」3等賞 文部省買上
1910（明 43 27 歳）	第4回文展「墓守」2等賞 文部省買上
1911（明 44 28 歳）	シンガポール、ブルネイ、その他、南洋を視察 第5回文展「土人の顔、其の二」3等賞 文部省買上
1912（大 1 29 歳）	第6回文展「若き日の影」3等賞 文部省買上
1913（大 2 30 歳）	第7回文展「含羞」2等賞
1914（大 3 31 歳）	第8回文展「いづみ」2等賞
1916（大 5 33 歳）	文展審査員に任命される
1919（大 8 36 歳）	帝展審査員に任命される
1921（大 10 38 歳）	東京美術学校教授に任ぜられる（山田やまと結婚）
1922（大 11 39 歳）	摂子生まれる
1925（大 14 42 歳）	響子生まれる
1927（昭 2 44 歳）	第1回朝倉塾彫塑展覧会（東京都美術館）
1934（昭 9 51 歳）	台東区谷中天王寺町、初音町にアトリエを改築、朝倉彫塑塾とする
1944（昭 19 61 歳）	過去40年間に制作した像、約400点 戦争による金属回収のため彫像のほとんど消滅、うち原型300点は保存
1945（昭 20 62 歳）	帝室技芸員に任ぜられる
1946（昭 21 63 歳）	12月、妻やま死去（享年60歳）
1948（昭 23 65 歳）	第6回文化勲章授与（大分県1号）
1958（昭 33 75 歳）	日展顧問となる
1961（昭 36 78 歳）	台東区名誉区民推戴
1964（昭 39 81 歳）	4月18日、急性骨髄性白血病にて死去



日比谷平左衛門像



台座

この第三工場の開業式は予て同会社合同の難関に処し絶大の功労ありたる日比谷平左衛門氏の銅像除幕式と相兼ねて去る24日正午より全会社敷地内に举行せらる来賓には李家知事、辻駿東郡長、水野事務官補、日比谷家々族その他京浜の有力なる実業家、新聞記者等約五百名に及びたり京浜の来賓は新橋より一、二等臨時列車にて正午12時小山に着し同時に知事一行と工場内広場の休憩所に於て数番の余興とすし、ビール等の饗応あり午後一時より祝典係員の案内にて第三工場の発電所より始め順次各工場を縦覧し新に設けられたる鮎沢稲荷社内の式場に参集す、かくて席定まるや君が代の奏楽ありて社長浜口吉右衛門氏開会を告げ事業の報告をなし来賓総代福沢桃介氏の祝辞ありて日比谷銅像除幕式に移り建設発起人総代森村市左衛門氏令息代つて建設の歴史を報告し日比谷氏令孫嬢糸を引いて幕を撤す来賓一同拍手して偉風を迎ふ次に浜口社長の式辞、李家知事の祝辞ありて富士瓦斯紡績会社の万歳を三唱し一同銅像を一順して職工寄宿館前の広場なる立食場に於て立食の饗応ありて隨時散会す此日初夏の天候鮮かに鮎沢川の流水淙々として無限の音楽を奏するが如く四山の新緑は西の方芙蓉の残雪と相對して富士瓦新紡績会社の前途を祝福するものに似たり
(『静岡民友新聞』明治41年5月26日)

※ 福沢桃介 今、在りせば…。巨人福沢諭吉を義父に持ちながら、諭吉に反発し、独歩の起業家精神を貫き通した電力王・桃介。傲慢と謙虚、冷酷と温厚、山師と篤志家、スキャンダルとロマン、相反する言動と評価のなか、日本を襲う幾多の経済危機を見事に乗りきってみせた鬼才といわれた男。



和田豊治像（会館内）

近代彫刻の先駆者・大熊氏広

大熊氏広（1856 年～1934 年）

・埼玉県 鳩ヶ谷市出身。明治 9 年、日本の本格的美術学校である工部美術学校が創立されたに「彫刻科」に入学し、一期生を主席で卒業。

その後、「有栖川邸」の彫刻を担当する。腕を買われ、「大村益次郎像」制作の依頼を受ける。更なる技術向上の為、留学を決意、三菱財閥 2 代目：岩崎弥之助の援助を受けヨーロッパに留学します。この日本初の西洋式銅像の成功により、その名声は不動のモノとなる。

彫刻の多くは当事者の依頼によるもので、モデルは皇族・政治家・軍人・実業家・学者と幅広く、当時の日本を代表する彫刻家として重きを成していた。

現存する主な作品・・・大村益次郎、有栖川宮熾仁親王、小松宮彰仁親王、八甲田山雪中行軍記念像（後藤伍長）、伊能忠敬、福沢諭吉など

大熊氏広作品集・4



日比谷平左衛門



橋本綱常



後藤新平

[illegible]

4 昭和11年(1936)富士紡績

向島の和田邸（豊門会館に移築後）跡地に小学校が建てられた

年 号	できごと ・ 町の様子	言 問 小 学 校 の あ ゆ み
昭和 8 年 (1933)	○本所区長が、東京市長に学校設置の願いを出す。	1 言問小学校ができたころ 言問小学校ができる前、この地域の子どもたちは小梅小か、今の本所高校付近にあった牛島小に通っていました。しかし、子どもの数が増え続けたため、二校の教室の数が足りなくなっていました。そこで、本所区（当時の墨田区は東京市本所区と、向島町とに別れていました）は、新しい小学校を建てることになりました。こうしてできたのが、言問小学校です。 言問小は、鐘紡の重役だった和田豊治さんの屋敷跡に建てられることになりました。当時はクレーンなどの機械は無いので、ほとんどの作業を人力でやりました。 新しい真っ白な鉄筋コンクリートの校舎は当時としてはとても豪華な物でした。関東大震災（1923年）の記憶がまだ生々しいころだったので、火にも揺れにも強い丈夫な校舎は、地域の人に、「白亜の殿堂」と呼ばれ、自慢の種になったそうです。  （開校当時の朝礼の様子） 言問小ができたとき、6年生は卒業が近いので、もとの学校に残りました。当時は各学年とも4学級ぐらいまであり、全校では1041名の子どもがいました。 新しい校舎には電動のこぎりやミシン、グランドピアノなど最新の施設がそろえられていました。暖房は、熱い蒸気を教室へ送るスチーム暖房でした。
昭和 9 年 (1934)	○東京市長が学校設置を認める。	
昭和 10 年 (1935)	○5月に本所区議会で、和田豊治さん宅あとに学校を作ることが決まる。 ・11月から工事が始まった。	
		
	（工事の様子）	
昭和 11 年 (1936)	・この年の12月に校舎が完成した。	
昭和 12 年 (1937)	○2月1日、東京市言問尋常小学校として、牛島・小梅小より児童を収容して開校。 ○校旗が制定される。 ・中国との全面戦争が始まる	
昭和 13 年 (1938)	○第一回卒業式が行われる。 （卒業生209名）	
昭和 14 年 (1939)	○11学級の高等科（今の中学にあたる）「言問尋常高等小学校」を併置。	
昭和 16 年 (1941)	○東京市言問国民小学校と名前が変わる。 ・米が通帳制になる。 ○防火用水が作られる。	

言問小学校付近地図





豊門会館開館式 大正 15 年 5 月 16 日





和田豊治氏遺徳碑除幕式典
朝倉文夫 作



昭和 13 年 2 月 1 5 日
飯沼静岡県知事記念撮影

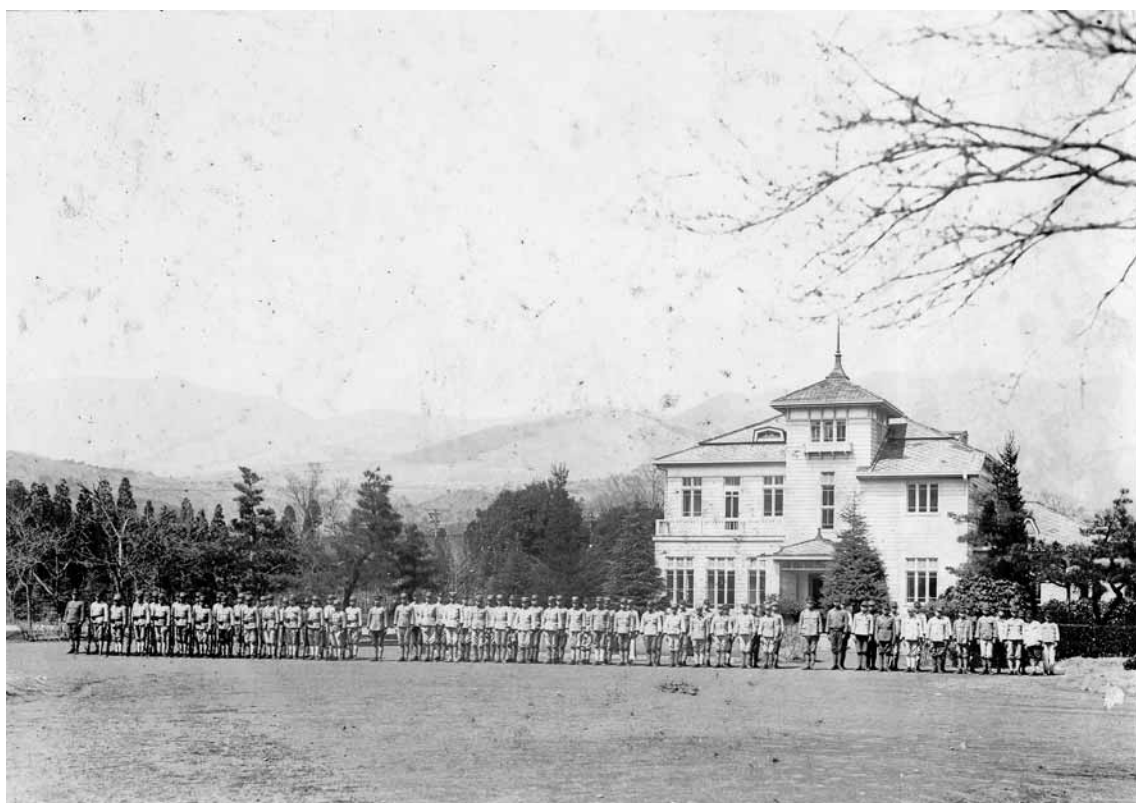
徳富蘇峰 昭和 11 年



李王垠殿下豊門会館ニ御投宿 昭和 14 年 1 2 月 2 日



豊門青年学校（撮影年月日不詳）



天皇閣下静岡県へ行幸ノ御砌侍従子爵黒田長啓氏ヲ小山工場ニ御差遣 昭和5年6月2日



小山時代和田氏の住宅



「六合山莊」扁額が掲げられていた頃



現在の工場長宅



向島和田邸海堂園に於ける鷗会



豊門会館移築完成 大正 15 年 3 月 3 1 日撮影



朝倉每人日記より

近代日本史料選書 山川出版社 1991 年発行 全6巻

(1) 小山を去る

前後八年余を暮らした小山の地も大要震災の復興も出来上つたので、大正十四年秋常務取締役役に就任することになり、小山を去ることになった。一木一石、寸石尺土、よく馴染みとなった、幽郷小山を去る心構は、何ともいえぬ名残り惜しさに堪えなかつた。永年顔と顔とをあわした知人故旧と袖を分つことの淋しさは何に警うるよしもなかつた。殊に永い間、起き臥しをした、茅屋、前に流るる鮎沢川や南方に連る足柄山の最、西窓に仰ぐ芙蓉の峰など風致に富む山荘に分る事の如何にも忍びがたいものがあつた。山荘は昔そのままの農家造で、瀟酒たる茅葺の家で、簡素生活には叶つたりの建方に出来て居る。六合山荘と称して富士紡初代の杜長富田鉄之助翁の為に設けられた邸である。荘名は勝海舟先生のつけられたもので、以前先生自署の「六合山荘」の木彫の扁額が椽先き楣間に掲げられてあつたと云うことを、聞いて居る。何とかしてこれを元の通りに復活したいと、捜したところ、同町の素封家室伏完氏の倉庫に収めてあることが分つた。聞けば、富田翁が同荘を去つて帰京する時、室伏氏に紀念として胎つたとのことである。私は室伏氏に請うて、これを譲りうけ、再び山荘の楣間に掲ぐことが出来た。丁度私も小山を去る間際であつたかたがた、好記念にもなった。更に震災のため裏山の崖が崩れた時にころげ落ちた巨石の形がいかにもよいので、これを洗い浄めた上「和田氏来居之迹」とゆう七文字を刻して、庭内の中央老樹の根元に建てて和田翁の住居した記念の碑を仰ぐことが出来た。彼の「六合山荘の扁額」、此の「和田氏来居之迹」の石碑は共に此の山荘の歴史を雄弁に語るものとなった。

六合山荘扁額之記 騎堂

鉄畊富見田翁嘗嘗別業干小山、名曰六合山荘、海舟先生為書贈扁額、筆勢雄勁高雅可賞也。翁去小山時、貼之室伏氏、及歿後嗣子完君以為不忍私之、余乃請君使之再掲山荘楣間、先生靈有、知其必莞爾含笑於泉下耶。

此山荘を去る年の前年夏の夕、朝日の顧問西村天囚先生をお迎したことがあつた。椽先きで涼風を掬しながら、四方山の談にふけて居たが、先生には、傍にあつた筆を執られて、画帖に「疑雨帖」と題せられ、「蓼々」の二字を揮毫された。これは庭先の山かげから落ちる水の音が恍惚として聞えて居る。投意揮毫されたことは想像に難くない。翌夜もお出になりて山荘の風光を賞せられて、おすきな芳醇を傾けながら一宵話し通したことがある。其節私のために一文を草して呉れた。それは恩人草野氏から贈られた一少匣に題するもので、流石当代一流の碩学、能書能文家だけありて、珍襲また範とすべきものがある。天囚先生終生の事業として大阪懷徳堂の完成に努力せられた甲斐もありて、其存在がわが儒教文化のために有意義のものであることは敬仰に値する。其後幾許もなくして、他界されたことは哀惜の至りである。

此山荘を去るに臨みて、知友数名と膝を交えて一夕、離荘の会を催ほした際、左の一詩を吟じた。

幽栖茅屋負山開 一脈清流脚下来

復旧漸成吾合去 欣然交友別離杯

この拙詩に次して同地の元老湯山剛平翁から玉韻をよせられた。

駿山鮎水為君開 辛苦業成幸福来

鴻德欲酬猶難尽 町民惜別泣衛杯

父の交友関係（同書最終巻から）

朝倉孝吉 文

大正八年に、富士紡の発祥地であり、穀倉であった小山工場の工場長に就任する。小山町はかつては全くの寒村であったが、明治二十九年富士紡の創立で、この地に工場が設立されることとなった。工場敷地の買収で坪七〇～八〇銭の土地が二円から三円近くまで値上りし、土地成金もできた。工場建設後工員が他の地方から流入し、人口は急増を続け、紡績工場としては東洋一の大工場となった。

小山工場長の役宅は、富田鉄之助、和田豊治も住んだ旧豪農の家で、勝海舟の「六合山荘」の額がかかっていた由緒ある家であった。

小山工場時代は、同工場が県下有数の大工場(当時、紡機二五万錘、織機約二千台、従業員一万人、五つの工場と三つの水力発電所をもっていた)であった関係上、静岡県下の工場協力会議長をはじめ県方面委員、勤儉貯蓄奨励委員などをしていたため県下の有力者との交際範囲が広くなると共に、大正九年取締役になり、財界人との接触も多くなる。一万人の従業員を擁する小山工場は、町全体が工場でできたようなもので、工場の厚生、教育、衛生、保健、娯楽の諸施設は町の施設でもあった。同時に農業と工業との調整もよく行われ、添田寿一、塩沢博士、気賀博士、永井博士ら労資協調会の幹都や労働問題の権威が工場を視察に来て昵懇になっている。父自身も協調会の『社会政策時報』の第一巻に「農工調整問題」について論文を書いている。父は小山時代が最も充実した思い出多いよき時代であったと後年よく語っていた。



朝倉每人氏が建てた石碑（平成 15 年 12 月 4 日撮影）

豊門寮に関する意見

- ① 中央の塔屋が印象的な、シンボリックな建物であり、軒下の持ち送りやサンルーム脇の小窓などにはアールデコの影響も見られる、県内では貴重な大正時代の洋館と思われます。洋館についてはペンキの剥落や一部に壁の破損なども見られ、保存状態が心配ですが、残す価値は十分にあるものと思われます。
- ② 豊門寮の方ですが、たいへん保存状態がよく、元の形をとどめていて美しい上に、現役で今でも寮として使われていることの意味が大きいと思います。東京で昭和初期の同潤会アパートが次々と取り壊されていく中、(内部は当時のままかどうかわかりませんが)昭和初期の集合住宅としてももっと注目されてよいのではないかと思います。

旧和田邸に関する意見

- ① 本宅については、生活空間と思われる和館に接客空間と思われる平屋建ての小規模な洋館が取り付く当時の富裕層の生活を偲ばせる住宅。静岡県内では、他にはほとんど残されていない貴重な物件と思われます。
さらに屋根に照りや起くりをつけていること、明治から大正ごろ(移築は大正14年)の建築であるにもかかわらず、写真で見ると、軒の線が崩れていないことなどから、施工の丁寧さもうかがわれます。
- ② 明治から大正にかけてというと、洋館を建てるのが、一部の華族や政治家だけではなく、少しずつ一般化し始めた時期だと思います。日本の洋館は、客を招いたりする洋館部分と、私的空間である和館とをもつものが多いのですが、もう少しあとの時代の庶民的な形では、応接間だけを洋間にして全体は和建築としたりもしたようです。(昭和初期の文化住宅などによく見られます)和田邸は、そのさきがけの形を持っているように思います。この時代の洋館はまだ荘重で、装飾の多いものをよく見ますが、和田邸の洋館部分は、鎧戸の上部に切り抜き板があることを除くと、非常にあっさりしています。この点も、和田邸の先駆性を示しているように思います。

資料参照

「森村市左衛門の無欲の生涯」 1999年4月 著者 砂川幸雄 発行 榊草思社
「富士紡績 100 年史」 平成 9 年 5 月 編集 富士紡績(株)社史編集委員会
「和田豊治傳」 大正 15 年 3 月 編集兼発行者 喜多貞吉 発行所 和田豊治編集所
「近世の巨人・正しき成功者 和田豊治を語る」 昭和 4 年 8 月 編集・発行者 野依秀一
発行所 実業の世界社
静岡県の近代化遺産「静岡県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書 平成 12 年 3 月
県教育委員会文化課 発行 県文化財保存協会
現代の架け橋「静岡県の土木建造物」 (社) 静岡県建設業協会・昭和会 平 8 年 10 月
日本の近代土木遺産「現存する重要な土木構造物 2000 選」 平成 13 年 3 月
編集 土木学会 土木史研究委員会 発行者・発行所 (社) 土木学会
実業の系譜 和田豊治日記 1993 年 8 月 発行 日本経済評論社
「偉人和田豊治翁」
「小山町報」
「小山町史 資料編」

先駆者の大地 森村グループ創始者 森村市左衛門

～近代セラミック産業を築いた「独立自営」の精神～

<http://manabow.com/pioneer/morimura/index.html>

IRマガジン 1999.4-5 号 http://www.net-ir.ne.jp/ir_maga/vol_37/i_mori.html

中津近代人物情報室 <http://www.h4.dion.ne.jp/~yoshisan/index.html>

ヴィバ中津サイト <http://www5b.biglobe.ne.jp/~roo-1/index/index.htm>

ZERO ZONE 偉人館 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~stakers/arch/arch.html>

竹田温泉「竹田茶寮」 滝廉太郎銅像 <http://www.h4.dion.ne.jp/~chikuden/>

朝倉文夫記念館 <http://www4.ocn.ne.jp/~asafumi/memorial/asakura.html>

グリーンパーク鳩ヶ谷自治会 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~gpnaka/index.htm>

近代彫刻の先駆者 大熊氏広の略歴

<http://www.city.hatogaya.saitama.jp/kyouiku/kyoudo/oukuma.htm>

屋外彫刻調査保存研究会・事務局 屋外彫刻一覧

<http://www4.famille.ne.jp/~okazaki/zenkokuchousa1.htm>

言問小学校ホームページ 言問小歴史絵巻

<http://www.city.sumida.tokyo.jp/~kototoisho/newpage13.htm>

製作 小山町都市整備課 整備係